

第75号

一水教育研究所

報 所

令和5年7月1日発行

一水教育研究所

豊島区巢鴨 3-17-2-309

所長 加藤 勲



教員や学校を後押しする 一水教育研究所を目指して

一水教育研究所 所長 加藤 勲

令和五年度がスタートし三ヶ月が過ぎようとしています。新型コロナウイルス感染症の終息宣言は出されていませんが、5月8日から感染症の取扱いが「2類」から「5類」に変更され、学校生活だけでなく社会生活も活気が戻って来ました。

教育を取り巻く状況の変化に注目しますと、今年3月8日に出された中教審答申「次期教育振興基本計画」における時期計画のコンセプトの中で、2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成について述べられています。また、今後の教育政策に関する基本的な方針として、「人生100年時代に複線化する生涯にわたって学び続ける学習者」を掲げています。

そして、4月1日には、「こども家庭庁」の創設「こども基本法」の施行がなされ、「こどもまんなか」社会の実現が大きく打ち出されました。

これら将来を担う子供たちの育成に向けた施策、安全・安心な教育環境の整備を元に、質の高い教育を子供たちに提供していくのは、私たち教員の重要な職務であります。

一水教育研究所は、東京都一水会が創設以来理念としている「研修の一水」「人材育成の一水」の強い後ろ盾となり、強固な連携を図った研修を企画実行していきます。

そのため、今年度の一水教育研究所は、昨年と同様、調査・資料作成部、研究開発部、教育経営部、幼児教育部、ゆりかもめ塾を設置いたします。そして、今までの活動実績と今日的な教育課題を注視しながら、学校現場で子供たちの教育に全力を尽くしている一人一人の管理職や教員の皆さんを支援して参ります。

体制といたしましては、昨年度まで長年研究局長をお勤めいただいた佐藤正志先生の後任として、研究局長に松浦正和先生を、「令和の日本型学校教育研修推進委員会」委員長に前小平市教育委員会教育長であり、東京都一水会第38代会長の古川正之先生を新たに迎え、東京都における管理職・教員の「資質・能力」向上に向けた今日的課題に対処していきます。

特に、ここ数年受験者が増え合格倍率が上がって来ている主任教諭選考には、一水教育研究所としても手厚い支援を講じていきます。東京都一水会が区部・市部でそれぞれ2回ずつ実施する「主任教諭研修会」への人的支援及び研修前に行う講演の実施をいたします。

次に昨年度まで一水教育研究所が主催していた年3回の特別研修会を見直し、秋に行ってきた第2回研修会を夏休みに変更し、今年度管理職に昇任した方々対象の研修会とした

します。昇任して4ヶ月、予想をはるかに超える職務量、日々押し寄せてくる心理的なプレッシャー、崩れやすくなった体調、学校を経営することの難しさや今までは違った立場での人材育成、直面する多くの難題について講義と演習を通して、夏休み明けに生き生きと子供たちのために活躍できる管理職への研修としていきます。

そして、なかなか聞くことのできない特色ある素晴らしい学校経営について、今年度も「経営論文」を募集し選考を通して会員の皆さんにお伝えしていきます。応募する側を考えますと、論文応募が自らにとつてより良い研修の場となるとともに、「論じる」とはどのようにすれば良いのか会員に伝える機会ともなり、相乗効果が期待されます。

一水教育研究所が有する経験豊かな人材、今まで積み上げてきた資料・資源や知見を生かし、質の高い教育実践と「研修」「人材育成」を図っていきたくと存じます。

今年度、本教育研究所の活動についてご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

履歴

昭和六十三年教職に就く。北区・文京区・豊島区で十五年間の教員生活を過ごす。その間に、東京都教員研究生を一年間経験し、その後A選考に合格。

東京都教職員研修センター、清瀬市教育委員会指導主事を経験後、豊島区で2校五年間の副校長・1校二年間の校長を経験。

平成二十八年に豊島区教育委員会指導課長となり3年間を過ごし、平成三十一年江東区立枝川小学校長となる。

東京都一水会では、平成三十一年から四年間の副会長を経て令和五年度、第四十七代会長に就任。

令和五年度 一水教育研究所活動方針

令和の日本型学校教育の 具現化に向けた支援と ミドルリーダーの育成

一水教育研究所研究局長

松浦 正和

五月の連休明けから、新型コロナウイルスの感染症法上の扱いが二類から五類に変更された。これに伴い世の中は一気にコロナ前に戻ろうとしているかのようだ。学校現場でもこれまで制限の多かった教育活動を解禁しようとしている。人と人のかかわりや協力などは大切だが、コロナウイルスがなくなつたわけではなく、これまでと状況はあまり変わっていない。実際に、五類に移行してから感染者は緩やかに拡大していると発表があった。子供の安心・安全を保障する上で、学校では、やはり感染症対策は欠かせない。子供同士の接触や距離感などの配慮は必要だと思われる。

また、世の中はチャットGPTに

代表されるようにAIの進化、ドローンやロボティクスの進化など、まさに変化の激しい予測不能な社会になりつつあるようだ。

学習指導要領では、予測の出来ないこれからの社会に生きる子供たちに「主体的・対話的で深い学び」を体験させ、「生きる力」を育むこと。また、令和三年に出された、中央教育審議会答申では、個別最適な学び（個に応じた学び）と協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげ、「全体的に育む」可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を目指すとされている。そしてその実現のために、感染症対策、働き方改革を踏まえ、新学習指導要領の着実な実施、ICT環境の活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備などをあげている。

タブレット端末を使った授業実践については、昨年度各支部長に協力をいただいたアンケートを見ると、低学年は、主に国語・算数・生活科で、中学年以上は全教科で使われている。使用頻度も学年が上がるにつれ頻繁に使用されている。授業としては課題も多いよう

だが、今の段階ではほとんど使われていくことも大事だと言われている。

また、ICT環境も地域によってまちまちである。そんな中で、各学校では、地域や家庭、そして子供や教職員の実態に応じて「令和の日本型学校教育」に取り組んでいる。

このような状況の中で、一水教育研究所は、各校の取組を全面的に支援していきたい。そのために次のように取り組んでいく。

一 日本型学校教育への支援

「令和の日本型学校教育」の具現化のための取組を支援することを基本方針とする。

主な活動を以下に紹介する。

研究開発部では、毎年経営論文・実践論文などを募集し、自校の経営や実践について、まとめたり振り返ったりする機会としている。そして、教育経営部の特別研修会で、優秀論文の執筆者に、自校の実践について発表する機会も設けている。

また、教育経営部では、夏に学校経営のあり方について、新任の校長を対象に研修会を開催する。

調査・資料作成部や令和の日本型学校教育研究推進委員会では、ICT活用や「個別最適な学び」「協働的な学び」についてなど、現場に必要な資料や情報を提供していく。

二 学校教育を担う ミドルリーダーの育成

ICT活用も含めた「令和の日本型学校教育」を実現していくためには、一人一人の教員の資質向上が欠かせない。特に、教員採用試験の倍率が低い上に人材不足が叫ばれている今日では、育成すべき一人一人の教員に応じていく必要がある。その意味でも、現実的には若手教員とかわりが多く、指導的立場にいるミドルリーダーの育成が欠かせない。

この点について、教育経営部の特別研修会で主任教諭や主任教諭を受験しようとするミドルリーダー向けの研修会を開く。そして、一水会主催の「主任教諭選考研修会」に全面的に協力していく。さらに、ゆりかもめ塾を通して、要請のあった支部において主任教諭選考に向けた研修会を開いていく。

また、主任・管理職選考受験者のための論文対策・面接対策にも積極的に関わっていく。

階層に応じた

教育課題解決を目指す

教育経営部長 山田 修司

一 教育経営部の活動

新型コロナウイルス感染のある程度の収束とともに、昨年度は何とか年三回の特別研修会を実施することができた。今年度についても通常通りの形での実施を考えている。昨年度は「令和の日本型学校教育の具現化に向けた学校支援とミドルリーダーの育成」をテーマとして掲げていたが、今年度は研究局長も代わり、新しい体制となったことから、第一回の役員・研究局長・事務局会での研究局長の研究方針を受けて内容の検討を行い、基本的には昨年度の内容を継続して取り組むこととした。ただ、基本的には第一回研修会では、主任教諭選考を目指している人や現在主任教諭として職務にあたっている人を対象にした内容を考えられている。また八月に実施予定の第二回では、今年度新たに校長に昇

任した人を対象とした研修内容を考えている。昨年度末、前一水会長や研究局長代理から、新任校長の学校経営に対する力量不足を心配する声があり、対象者を絞った形で実効性のある研修を目指すこととなった。最後の三回は従前どおり、応募論文の優秀賞受賞者を講師として依頼し、学校経営について発表する研修を計画している。

また、新型コロナウイルスの感染の中、各学校がどのような取り組みを推進し、新しい形の教育を模索しているか、特に、個別最適な学びを推進する中で、指導の個別化と学習の個性化をどうしているかについて取り上げ、共有する機会をもてればと考えている。このような新しい課題に対応していくために、研究所全体では特別委員会も設置し、何らかの形で研究所の考えや各学校での実践状況を検証していく予定である。

研究所創立から二十六年が経過しているが、活動が停止した経験はもちろん初めてであるが、昨年度は何か元に近い形で三回の研修会を実施することができた。今

はできることを確実に実施する中から新たな発信もできると考えている。

また、教育経営部は組織としては十五年目を迎える。「学校経営」ではなく、「教育経営」として学校教育をとらえ、子どもたちへの教育活動はもちろん、保護者、地域とのかかわりや育成、学校を取り巻く環境の整備等、学校につながる様々な要因に対し、総合的に経営していくことこそが、学校経営の目指すところであり、様々な課題や困難へ先を見通した着実な取り組みが求められている。その点からもトップリーダーとしての管理職への期待は大きく、組織の活性化のためにもそれを支えるミドルリーダーの育成と実力アップが求められている。そのことを自覚し、組織の一員としての役割を果たしていくことが教育経営の更なる充実につながっていくと考えている。

二 今年度の取り組み

○年間の共通テーマである「令和の日本型学校教育の具現化に向けた学校支援とミドルリーダー

の育成」のもと、特別研修会実施を主な活動とし、これまで取り組んできたミドルリーダーである主幹・主任教諭の育成や学校経営への参画への意識改革以外にも、新しく校長職として学校経営を担うことになった方々にも、一日も早くもてる力を存分に発揮できるよう、日々の課題を共有し解決策を考えていく機会をもつていこうと考え、その内容で第二回研修会を実施することとした。

○七月は、令和の日本型教育を含め、学校での課題や取り組みを発表してもらい、そのことをもとにしたディスカッションする機会などを予定している。

○二月に予定されている特別研修会では経営論文・実践論文の発表を行い、広く経営・実践を学ぶ機会とする。

【特別研修会】(予定)

- 第一回 六月 三日(土) 枝川小
- 第二回 七月二九日(土) 枝川小
- 第三回 二月一七日(土) 枝川小

論文応募を通して

「研修の一水」の

さらなる充実を

研究開発部長 安齋 正彦

これからの教育経営を充実させるために、「研修の一水」において、自ら進んで、己のビジョンを論文形式で示し、リフレクションすることは、教育者としての資質・能力を高めるうえで非常に重要です。

その意味でも、今年度も昨年度同様に、論文応募の機会を各自のよい研修の場として、積極的に活用し、「研修の一水」としての伝統を継続していただきたいと考えます。

昨年度から一水会運営の在り方自体も転換が図られてきていることは御存じのことでしょう。このような転換期において、各会員が職層毎に自己実現を図っていくためには、論文を通して自己の教育ビジョンを可視化し、周囲に発信することで、自己効力感を高めることが必要です。是非どの会員

もためらわず、一度は論文応募にチャレンジしてみる事です。今こそ一人一人が自分事として応募し、御自身が目指す教育の理想を語ってください。

三年前、幼稚園こども園の全会員の中から「教育実践論文」を応募していただく願いがようやく実現しました。一昨年は一支部から四名、昨年度は六名もの応募があり、その中から「岩上賞」も選ばれました。改めて、支部長の働き掛けがどれだけ大切なのか、各支部長の役割の重要性を感じます。本年度も、昨年度同様、部として今年度につなげていくよう、「職層毎に応募枠を広げていく」という方向を崩さずに目指してまいります。

そして、本年度も次の要項で募集をいたします。各ブロック支部からは令和の日本型学校教育の具体化に向けて、先進的な実践をされているブロック内の会員、ミドルリーダーとなつて指導力を発揮して欲しい会員を積極的に御推薦いただきたいと思います。多くの職層からの応募、特に主任教諭層からの応募をお待ちしております。

令和五年度 募集要項

【募集する論文】①より優先順位

①「令和の日本型学校教育（個別最適な学びと協働的な学び）の具現化」「学校を担うミドルリーダーの育成」に向けた経営・実践論文

②自らの教育課題を設定し、解決策を研究した実践論文

③自校の課題解決に、具体的方策を示した経営または実践論文

④学校園経営方針の成果を示した論文等、会員一人一人が「欲しい情報」「活用できる」経営・実践論文

【募集方法】

○個人応募：個人単位の応募

○推薦応募：各ブロック支部長、幼稚園・こども園部会による推薦（新任は除く）

【字数等】

○A4版 四三三×三七行

二〜五枚程度（図表を含む）

【提出期限】

○令和五年八月十八日（金）

※データと紙ベースで提出ください。

※個人応募は事前に連絡ください。

【問い合わせ・提出先】

○研究開発部長 安齋 正彦

【論文審査】

○一水会教育研究所役員会にて

令和五年十一月三十日（木）

※審査後応募者全員に結果通知

【表彰式】

○東京都一水会新年会

令和六年二月二日（金）

※優秀賞以上に賞状と副賞を贈呈

※入賞者全員に賞状贈呈

【口頭発表会】

○第三回特別研修会

令和六年二月十七日（土）

【紙上発表】

○『雄飛第54集』：優秀賞以上掲載

○『研究所所報77号』：概要寸評

掲載

お詫び

昨年度の所報七十四号に掲載した経営論文のうち、

八ページの入賞作「できることから始める働き方改革を目指して」

文京区立関口台町小学校 校長

湊 仁

となっていました。正しくは

文京区立関口台町小学校 校長

佐藤 雅彦

でした。両校長及び関係者の方には、心よりお詫びいたします。

次代を担う管理職に 求めたいもの

調査・資料作成部長 大原 龍一

今年度「一水教育研究所」では夏に新任の校長先生方を対象に学校経営の在り方について特別研修会を開催します。この複雑・多様化する時代にあつて、いかに自らの経営力の向上を図るかということが切実な課題となつていくからです。以下、少しでもお役に立てたらと思ひ駄文を弄します。

一 校長は、孤独である

一校を預かる校長は「孤独である」とよく言います。校長に限らず多くのトップはそうであるのでしよう。最終的な決断は一人で行わなければならないし、そのことに対して責任を取るのも校長ただ一人です。そう、校長はただ一人学校の中で「責任を取る」立場なのです。以前、「民主的」という言葉がよく使われていました。校長が「こうしたい」ということ

に反対する場合「その決め方は民主的ではない」と言うのです。「もつとみんなの意見を聞いてみんなが納得するように決めてもらいたい」と言うのです。しかし、それは違います。「校長である私以外の皆さんは責任を取る立場ではありません」「説明責任はありますが、責任を取ることはできません。責任を取る立場の者が決断を下すのです。民主的というのはこのようなことをいうのです」とよく言ったものです。

孤独に話を戻します。孤独の「独」は独立の「独」でもありません。独はふつう他に對するひとり、数多に對する孤、という意味に使われますが、本来はそうではなく、「絶対」という意味があります。人前だとか、手段だとかいうような相対的な自己ではなく、「絶対的な自己」を独と言うのです。したがって、「独立」とは何物にも依存しないで自己自身で立つという權威のある言葉なのです。国家、民族が独立するということは、他国に依存し左右されないでその国家、民族自体において存在するのです。もろもろのものから影響を

受けることなく超越して、もう一段上に出て創造的進歩をすることなのです。そのような意味で、校長も孤独なのであります。

二 「四耐」と「四患」

これも私の好きな言葉です。「四耐」は、清代末期の政治家「曾國藩（そうこくはん）」が残した言葉です。正確に言うると「四耐四不訣」。

【四耐】・冷に耐え（冷遇、冷たい仕打ちや誤解に耐える）・

苦に耐え（心身ともに苦しむことに耐える）・煩に耐え（煩雑、忙しいことに耐える）・閑に耐え（閑、閑職、窓際、左遷などに耐える）

ストイックですが、皆様にはどれが大変でしょうか。私は最後の「閑」です。現役を終えソフトウェアの時代に突入してしまいが、やはり何もなくなってしまうことはとても怖いものです。現役の校長先生にはやるのが山ほどあります。しかし、私から見ればうらやましい限りです。大変なお仕事ですが、肚をくくって今を頑

張っていただければと思つています。忙があるから閑がある、閑の中に閑はないのですね。

【四不訣】・激せず（つまらないことで怒つてはいけない）・躁がず（些細なことで騒いではいけない）・競わず（競争してはいけない）・随わず（己の強さを信じ、言いなりになつてはいけない）

最後に、「四患」。

【四患】・偽（嘘、偽り）・私（私心、私欲）・放（放埒、脱線）・奢（奢は制を破る、掟がでたらめ）

まあ、こんな管理職はダメですね。信頼されないのです、人心掌握もできません。



幼少における学びの 連続性の情報収集と 発信

発行

幼児（保・幼・小連携） 研究部長

泉 雅美

一 学びの連続性の教育内容を 保護者・地域に発信

小学校就学前のすべての子供の健やかな成長に向けた「こども家庭庁」が4月に創設し、行政が幼児教育に本腰で取り組み始めた。

そのような状況の中で、地域の幼児教育のセンター的役割を担う東京都の公立幼稚園の園児の減少が課題となっている。その要因としては、幼児教育の無償化、保護者の就労に伴う支援が増えた状況などがあると思われる。

各区では、公立幼稚園の強みとして幼小連携の充実に加え、3歳児学級を増設したり、就労を支援する預かり保育やこども園化を進めたりしている。

さらに、幼児が遊びや生活での経験を通して、どのように学び、

成長していくかを可視化し、幼小の教育内容における学びの連続性を、未就園児の保護者や地域・学校関係者へより理解してもらえる発信方法に取り組んでいる。

昨年度は幼小連携の研究にとどまらず、幼稚園と小学校の保護者へ、子供の姿を通して、幼小の教育内容における学びの連続性を「研究だより」として発信する取組があった。

二 今年度の取組

今年度の幼児研究部では、「幼小連携の現状と課題」を捉え、その解決に向けて、行政の取組をふまえて幼児教育の現場での情報を収集する。



「ゆりかもめ塾」の

御案内

ゆりかもめ塾運営委員長

佐藤 伸彦

一 「ゆりかもめ塾」とは？

東京の県鳥「ゆりかもめ」のように、「いつでも、どこへでも、すぐに」要請のあった東京都一水会の各支部へ出向きます。

二 「ゆりかもめ塾」の 活動内容

研修会に講師を派遣します。

(活用例として)

- ①各選考に向けて
- ・「論文作成に向けた講義や演習」
- ・「面接練習」
- ・「主任教諭を目指す先生方へ」
- ②現職での力をつけていくために
- ・「一年目の副校長への助言」
- ・「ミドルリーダーの育成に向けて」
- ・「若手教員の学級経営力育成」
等

人材育成について、お役に立てそうなことがありましたらぜひご相談下さい。

三 「ゆりかもめ塾」への 要請

講師料は必要ありません。学校単位、数校単位でも構いません。まずは気軽にご相談下さい。

お問い合わせは、

satou521nr@sun.cims.jp

または

090-1043-8520

佐藤まで。

お電話・メール等何でも結構です。



特別研修会

六月三日の土曜日、江東区立枝川小学校にて特別研修会を開催しました。

研修会の主題は、「令和の日本型学校教育の具現化に向けた学校支援とミドルリーダーの育成」でした。

当日は、七名の受講生が参加し、自分の職務を整理し、課題解決に向けた具体的な方策を明確にすることができ、よい学びの機会となりました。一水教育研究所長、顧問をはじめ、研究所員、そして一水会の校長が参加し、受講生の学びの充実を支えました。

当日の研修会の内容は次の通りです。

まず、一水教育研究所松浦正和研究局長が、「ミドルリーダーに期待する役割」と題して、講話を行いました。現在の学校を取り巻く状況、例えば、一人一台のタブレット端末の導入に伴う学びの変化、学校でのチャットGPTの活用方法の工夫、個別最適な学びの

充実に向けて等、変化の激しい状況に応じた教育活動の改善が求められることを具体的にお話しいただきました。その中で、若手教員の増加に伴い、各学校においては、ミドルリーダーである、主任教諭が教育活動をリードし、若手教員を育成していくことが求められていることについてのお話がありました。この講話を通し、受講生の一人一人は、自分が分掌において求められる役割を再確認していました。

続いて、二つの分科会に分かれて協議を行いました。各グループともに、司会の研究所員を中心に、各自の分掌の現状や課題、職務遂行上の困っていることや悩んでいること等を互いに出し合いました。例えば、ICT主任として、児童、教職員のタブレット端末活用における技能の個人差をどのように埋めていくか、そのための手立てをどうしていくか等の話が出ていました。ではどのような方策があるのか、同じグループの受講生同士で意見を出し合ったり、周りの研究所員、校長からヒントをいただいたりしながら、具体的な

方策を一人一人が整理してました。また、副校長として、主任教諭が自ら主体的に考え、学校の教育活動の充実に向け、具体的な提案を行う意識を高めていくためにはどうしたらよいかという悩みが出されました。研究所員からは、管理職としてその主任教諭に、どこまでを求めるのか、経営方針に基づき、ゴールをどこに設定するかを明確に示すことがポイントである等の助言が出されました。各グループで一人一人の受講生が自分の言葉で語り、具体的な指導・助言を受ける中で、具体策が整理されているのを感じました。

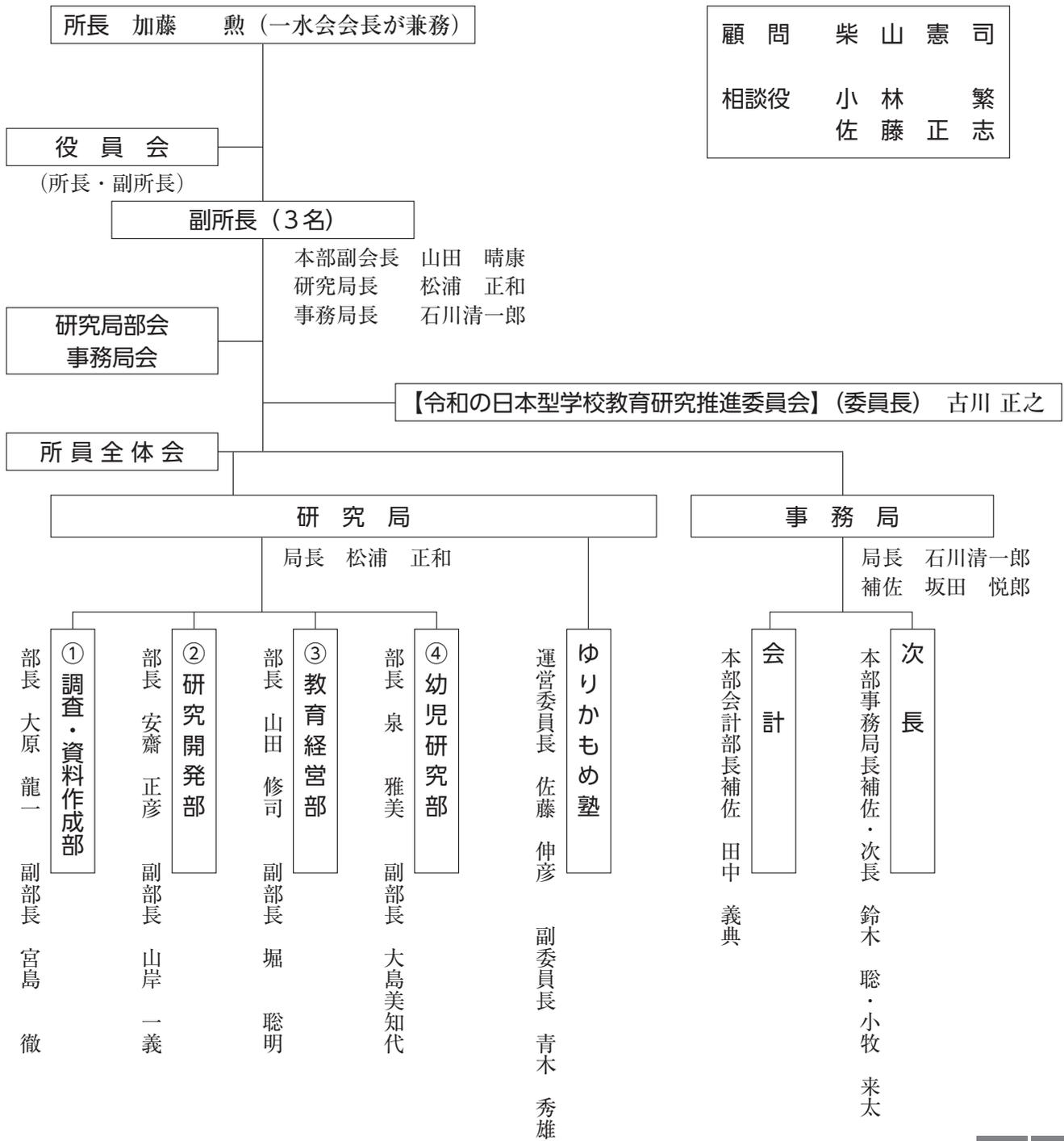
最後は、令和の日本型学校教育研究推進委員会の古川正之委員長がまとめをされました。令和の日本型学校教育を考えるに当たっては、日本の教育のよさを再確認し、学校運営の改善を図っていくことが重要であるとお話がありました。常に学校の課題は何かの意識をもち、どうやって他教員を巻き込み、課題解決につなげていくかを考えることについてご指導がありました。この主任教諭選考は、将来の自分の学校づくりにつ

ながっていくものであると捉え、笑顔で、力強く進んでいってほしいという力強い応援メッセージをいただきました。

第一回の特別研修会は、受講生にとって、自分の分掌の充実に向けた具体的な手立てを整理する貴重な機会となり、大成功で終了しました。



令和5年度 一水教育研究所運営組織



編集後記

新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザと同じ「5類」へ引き下げられました。マスクを外す子供たちも増え、改めて、子供たちの素敵な笑顔を見ることができ、喜びを感じています。

感染症へ対応する中で私たちが手にした、様々な手立てや工夫を、今後も教育活動に有効に活用し、更なる教育の充実を図っていききたいものです。

今年度も、研修の充実、会員相互の強固な連携の中で、切磋琢磨し、より良い教育の提供をしていきます。

本部副会長
 山田 晴康

